

平成30年度春学期・大学院授業評価まとめ

整理番号	講義名	講義コード	履修者数	回収数	回収率	平均値	授業評価表の分析	次回講義への対応	その他
1	植物生産科学特論	18660002	22	14	64%	3.93	評価の平均点はほぼ4であった。「学生と教員とのやりとりには双方向性があった」については、評価の平均点が3.6で最も低かった。	学生とのやりとりを多くするため、学生への質問を多くし、何故このような結論が得られたのかを一緒に考えていく時間を増やすように改善をする。	
2	動物・水圏資源保全学	18660101	27	11	41%	4.17	共通項目では51項目が3.6と平均点を下回った。シラバスが明確にできていなかったことが原因だと考えられる。オムニバス講義ではあるためだと思われる。他の項目は平均点以上であったが、授業内容や方法についてさらに改善を進めたい。	次年度はシラバスを明確かつ統一性のあるものとしたい。授業内容や方法も工夫を凝らし、改善して行きたい。	
3	生殖生物学特論	18660102	30	12	40%	3.9	アンケート回答率は40%と、全体平均を下回った。評価の平均点は4.1であった。「学生と教員とのやりとりには双方向性があった」については、評価の平均点が3.9で最も低かった。	「学生とのやりとり」が低い評価であったのは、この授業がオムニバス形式で行われ、講師一人当たりの授業数が少ないためと思われる。	
4	動物・海洋生物科学特論	18660103	27	12	44%	3.81	E科目は初めての開講であり、必修であったためアンケートにおける満足度もばらつきがみられた。英語であるだけでハードルを高く感じる学生が多いこと、4月選退であったため学府国際コースの学生が未入学で日本人学生のみが開講となったことが英語の必要性認知に影響を及ぼしたと思われる。	授業形式を再度見直すこと、学生が修士で卒業していくのが大半の中研究者要請課程としての専門性の深化の方法について検討を行い授業の目的と満足度を向上を目指す。	
5	水族生理学特論	18660109	16	6	38%	3.92	全体的に平均値、またはそれをやや下回っていた。特に、「教員は、毎回の授業で、学ぶべき重要な目標を明確に示した」の評価が3.5と最も低かった。	前年度までは少人数の学生を対象に専門的なテキスト等を用いた講義を行っていたが、本年度から受講者が増え、水族生理とはなじみの少ない学生も多く含まれていたため、各々の学生の基礎知識の違いへの対応や授業の進め方が十分でなかったと考えられる。次年度からはそれぞれの学生の関心や理解度が深まるように講義の内容や進め方を改善する。	
6	森林資源管理学	18661002	17	10	59%	4.49	回答者(59%)の評価は、5と4で概ね肯定的な評価である。難易度が適切であったかについての回答が低い傾向があった。	カリキュラムの変更で2単位が1単位、また担当教員の変更で内容の厳選をすすめて、学生の理解力を高めようとする改善をはかる。特に、地球森林科学コース以外また留学生の割合が一定数いるため、基礎的な事項についてしっかり説明する必要がある。質問や議論ができるように、双方向性を高める工夫・対策を考えたい。	
7	生産環境の科学	18661101	16	4	25%	4.49	登録数16名中、回答は4名(25%)であった。 各項目の平均値は、「シラバスの学習目標は明確だった」=4.1、「教員は、毎回の授業で、学ぶべき重要な目標を明確に示した」=4.1、「授業の難易度は適切であったか」=4.0、「学生と教員とのやりとりには双方向性があった」=3.9、「教員の説明はわかりやすかった」=4.1、「教員は、授業に十分準備して臨んでいた」=4.2、「教員は、授業に対して熱意を持っていた」=4.2、「授業には遅刻することなく毎回出席した」=4.5、「この授業内容についてより深く学びたいか」=4.0、「総合的に考えて、現在この授業に満足している」=4.1、以上であった。	回答数が少ないため、次年度へのフィードバックは難しいが、「学生と教員とのやりとりには双方向性があった」=3.9は改善が必要であろう。	特になし。
8	生産環境データ解析論	18661102	15	3	20%	4.57	・アンケートへの回答数が少なく、十分な考察は行えないものの、本講義は一部の項目を除いて概ね学生から高く評価されていると思われる。 ・プログラミングやデータベースに関して、本専攻の学生はあまり教育を受けていないため、内容が難しいと思った学生が複数名いた。	・M2Bの操作に慣れていない学生が複数名いた。次回からは講義のはじめに操作方法の説明の有無を確認することとした。 ・プログラミングやデータベースについて、本専攻の学生はあまり教育を受けていないため、講義内容を変更し、説明時間を多くとるようにしたいと思う。	・M2Bの動作速度の問題や通信不良が発生したことで、講義進行への支障(通信不良による講義の遅延)が複数回発生した。M2Bの利用を推奨するのであれば、システムが安定的でかつ快適に動作するようにしてほしい。kitenetの通信不良が生じることもあった。
9	熱と流れの科学	18661103	13	3	23%	4.54	全ての設問の回答が、肯定的回答の目安となる4を超えており、1、2の回答のあった設問がなかったこと、とくに、学務デザインの2項目とインストラクションの2項目については、4、7と高いことから、全体的に評価の高い授業を提供できたと考ええる。	当該教育コースのエッセンシャル的な位置づけにある本講義の評価が上記のとおり高いことから、講義内容や講義に当たっての姿勢を維持したい。今回アンケートとの回収率が低かったことから、もう少し授業の中で周知徹底する努力をする。	
10	地盤環境工学特論	18661106	1	1	100%	4.7	カリキュラムの変更(見直し)により、今年度からこの科目の単位数は1となり、春学期の開講となったが、受講者数が少ない(今期は1名)という状況は変わらなかった。 新しい授業評価手法(授業アンケート)の結果(概ね回答が「4」以上)ならびに受講状況、課題レポートの提出状況とその内容、などを踏まえると、授業全体としては概ね支持されていたようだ。	今期の授業では、土質力学や地盤工学における基礎的な内容を主に取り扱った。今後は、できるだけ授業内容と実務(現場)との関わりを具体的に説明したり、あるいはタイムリーな話題(自然災害、防災・減災など)を取り入れたりする、などによって、授業への興味・関心をより持たせ、授業へ能動的な姿勢で参加させるようにしたい。 授業においては、受講状況や課題レポートの提出状況・内容などを通して、学生の理解度を常に把握しながら授業を進めることに努めたい。また、受講者数を増やすための何らかの工夫・対策を考えたい。	特になし。
11	農業情報学特論	18661109	12	3	25%	4.53	アンケートの回収数が3名と少なく分析が難しいところであるが、評価項目の全てで4以上であったので大きな問題はなかったと考える。若干名、講義内容が難しいと感じている学生がいたので、改善が必要である。	課題の提出状況から講義の難易度を検討の上、講義内容の改善を図る。	
12	木質の形成と利用	18661301	22	16	73%	3.54	この講義は3人の教員で木質の形成と利用に関する講義を1回完結型で行うものでコア科目に位置付けている。科目群平均はほとんど差がないが、良い評価は準備が十分と熱意、よくない評価は双方向性であった。	この講義の趣旨として、外部から修士に入学した学生への基礎という側面もあり、全体を満足させるのは難しいが、授業評価を参考にしながら進めていく。	
13	サステナブル資源科学	18661302	23	17	74%	3.52	本講義はE科目であり、サステナブル資源科学講座の構成教員によって実施され、松村順司、中尾哲也、堤祐司、北岡卓也、近藤哲男、巽大輔、久米篤の各教員による分担で実施された。Webアンケートは総じて全体平均よりも少しづつ低く、各項目で1を選んだ受講者も複数名いた。これは、多様な専門分野の俯瞰を目的とした必修科目のため、受講者および各講師の専門が多様になり、受講者側で学習目標や難易度の把握が難しかったためと考えられる。また、科目を実施する側のコンセプトが固め切れておらず、特に今年度は日本語話者だけの受講者構成となったため、英語による講義の実施が徹底されなかった。	来年度は完全なE科目として英語中心の講義として実施する方針で、受講者の学習目標をより明確にできると考えている。受講者側の英語レベルの向上も期待できるため、効果的に新大学院カリキュラムを実施できるよう、各専門科目との連携を深めたい。また、学習目標の明確化や各講義間での難易度の平準化も進めていきたい。	日本語話者しかいない環境で、日本人講師が英語で専門分野の講義することは不自然であり、国際コースとの連携が重要である。

平成30年度春学期・大学院授業評価まとめ

整理番号	講義名	講義コード	履修者数	回収数	回収率	平均値	授業評価表の分析	次回講義への対応	その他
14	木質理学特論	18661303	19	13	68%	3.54	この講義は自分の研究の歴史的背景をプレゼンし、ディスカッションした。この講義方式は受講生にとって興味深かったと思うが、受講生19名の雰囲気良かったことから、ディスカッションも盛り上がった。評価が最も高かった項目は教員との双方向性であった。	次年度もこの自ら主体的に取り組む形式を進める予定であるが、受講生の雰囲気左右されるところがあるので、今年度との比較を行いたいと思う。	
15	生物材料設計学	18661307	19	14	74%	4.08	評価は、5と4が多く、現況の授業で十分と考えられる。本来ならば、もう少し有機合成材料設計的要素を講義に導入したいところだが、1単位授業となり、そういう内容を盛り込むことができないのが残念である。	次年度は、熱力学観点からの材料設計を中心に受講生に考えてもらう講義を実施するつもりである。	
16	ミクロ経済学特論	18662001	2	2	100%	4.7	すべての項目において、科目群平均以上のポイントを得られた。また、すべての項目において、平均点が4.0以上であったことから、全体的に高い評価を受けることができたと考えられる。	「授業の難易度は適切であったか」という項目のポイントが最も低かった(4.0)ため、学生の理解度を随時確認しながら、授業を行うようにしたい。	
17	政治経済学特論	18662002	3	2	67%	4.95	登録者数3名、うち回答者数2名なので、数値評価の分析は難しいが、一応、1つの項目を除いては5ポイントだったので、受講者の評価は高かったものと考えられる。ポイントが4.5だったのは「授業の難易度」であり、これは今年度使用テキストで、現代世界経済の政治経済学的把握に必要なになっている資本主義の金融化の理論的把握の部分が、経済学部等と違って国際金融論、証券市場論、国際通貨制度論などを学ぶ機会に恵まれない農学部等出身者には若干難易度が高かったことが影響していると考えられる。	全体としての授業の方式は継続するが、次年度は農学部等出身者にも受け入れやすい内容と難易度のテキストを選定する方向で考える。	
18	経営学特論	18662003	4	3	75%	4.88	毎週、学生が興味のあるテキストをまとめ、レジュメを準備し、プレゼンテーションを行い、その後、ディスカッションを行う形式で授業を進行した。本年度は、MBAマネジメントの教科書に加え、ハーバードビジネスレビュー等、取り上げられていた論文や関連書籍も副読本として利用した。 今年度は、受講生が4人と少なかったため、かなり学生との距離が近く、深い内容の議論ができたといえる。そのため、報告者以外の学生も事前にテキストで予習を行い、授業に臨んでいた。 また授業では、報告者自身が理解できなかった点などの質問の時間を設け、双方向からの討議を求めた。教員自身は、ディスカッションでの話題提供を含めた講義を行い、理解の深化を図った。 それらの結果、「総合的に考えて、現在この授業に満足している」に関しては、全員が「強くそう思う」との評価であった。	講義の全体的な評価は高かったため、今年度の形式を深化させ次年度以降も講義を行う。 今年度は、日本人学生2名、留学生2名、と受講生が少なかった。また、2コマ連続の講義であったため、継続した集中力を要する中でのディスカッションであったため、学生にとっても負担があったのではないと思われる。次年度以降は、講義の時間を増やすなどの対応が必要となることも示唆された。	

平成30年度春学期・大学院授業評価まとめ

整理番号	講義名	講義コード	履修者数	回収数	回収率	平均値	授業評価表の分析	次回講義への対応	その他
19	計量経済学特論	18662004	5	4	80%	4.23	大学院受講者が5名の中でアンケート回答者は4名であった。結果を見ると、授業の難易度が適切であったか(3.0)、授業内容についてより深く学びたいか(3.8)、この授業に満足している(2.8)と低い結果となった。この理由として考えられることは、本講義が平成30年度春学期から完全E科目化したことである((3)その他を参照)。受講者全員が日本人と日本語コースの留学生であったためである。	国際化を進める方針なので、英語での講義を続けていく予定である。講義が難しいと感じる学生には、講義終了後に個別に対応し、理解して貰うように努める予定である。 次年度からは国際コースの院生も受講するようになるため、多少評価は上がるのではないかと予想している。	自由記述回答一覧は以下の通りである(原文まま)。 ① 専門性の高いこの講義において、言語を英語で縛ることに必要性を全く感じなかった。この講義の受講者は全員が日本人ないし日本語コースで留学してきた外国人学生のみであり、講義内容をきちんと学びたいと思いついて出席している。さらに、日本語をあまり必要としない国際コースの学生は、そもそもこの講義が単位として不要であり、これらの事からも英語で行う必要性はなかったと思われる。 ② それなりに基礎がわかっていないと、英語の授業だと全く分からなくて大変でした。 ③ 日本語で授業をやってほしいです。
20	ゲーム理論特論	18662005	1	1	100%	4.8	受講者および回答者1名であり、分析に耐えるものではないが、受講者の評価は、授業の難易度、教員の熱意の2項目が4である以外はすべて5であり、概ね問題なかったと考える。	例年、受講生が少なくなる傾向にある。個々の学生の学習段階に応じた柔軟な講義内容としていきたい。	
21	生物機能分子化学 I	18663001	27	9	33%	3.97	リレー講義でE科目なので、受講生に戸惑いがあったと思う。	受講者の反応をよく把握しながら進めたい。	
22	生物機能分子化学 II	18663002	25	9	36%	3.97			
23	システム生物工学特論	18663101	5	2	40%	4.75	授業の内容および進め方については、高評価を得られ概ね学生の意欲を引き出しつつ、上手く進行できたと考えられる。「総合的に考えて、現在この授業に満足している」の質問事項は全員が満足度5の回答を得たため、学生の要望に応じていると考えられる。	アンケート結果から、授業の進め方や資料の利用は適切であったと判断される。シラバス評価が良かったので、今後は更に多くの学生が見て参考にしよう呼びかけを行いたい。今後も学生の興味を引き出しながら授業を進めていきたい。	
24	バイオリソース特論	18663102	29	9	31%	3.37	多くの項目で評価が分かれる結果になった。アンケートの回収が30%であるので来年度の状況も分析する必要があるが、2極化している理由を明らかにする必要があると考える。今年から本科目はE科目となって英語の講義となった。7名の教員が担当し、対応も今年が初めて、教員間での対応、また学生の期待する内容も分かれる形になったと分析している。	教員間でE科目に対する講義方法、内容、レベルを打ち合わせる必要がある。可能であれば、学生からもE科目に対する期待と不安点を探って講義を行う。取り纏める立場の者として、講義の感想を聞いたが、英語のみの講義でレベルに付いて行けるかとの声があった。その一方で英語のみでの講義を期待する意見もあったので、理解度をチェックしながら講義を進めて行き、改善点を明らかにして行く必要があると考える。	なし。
25	システム生物化学特論	18663103	20	6	30%	4.55	20名中6名と回収率が低いものとなっているが、半数以上が全項目で満足度5の回答を行っていた。全体をみても担当講義の平均が4.2から4.8の間になっており、概ね満足度の高い授業を行えたものと考えられる。ただし、共60の「授業の双方向性」に関しての設問に関しては一番評価が低く改善の余地があると考えられる。	より満足度の高い講義を行えるよう努力していきたい。特に授業の双方向性に関しては工夫をしていきたい。	春学期の授業アンケートを夏学期の終了後に行うことに疑問を感じる。回収率の低さの一因となっていると考えられる。
26	環境微生物学特論	18663104	25	9	36%	4.26	はじめてのオンライン回答のケースであったことから回収率が36%と極めて低かった。その中で、項目のほぼすべてで科目群平均値を上回っていたことは評価される。主体的学習(4.8)が高かった一方で学習意欲(3.9)が低かったことは受講生の専門に対する方向性を考慮する必要性があることを示している。	Moodleの利用法を含めて教員の利用についての習熟が望まれる。 今後も学生と向き合った授業を継続して行っていく。	
27	微生物生産工学特論	18663105	30	11	37%	4.3	今年度から退官された教員の代わりに新たな教員を加えて授業を行った。難しい内容についてわかりやすく説明して興味が持てた等の意見が学生からあり、概ね満足度の高い内容であったと考えている。	全アンケートの中で唯一授業に双方向性があったという項目の評価が低かった。これは限られた授業の時間で各教員が丁寧に説明したために、質問等の時間がなかったことによると思われる。次回は授業中に学生からの意見や質問を受け付けるなどの工夫が必要であり改善していきたい。	
28	細胞機能工学特論	18663110	50	23	46%	4.31	88.1%の学生から回答が得られ、比較的満足度は高いように見受けられた。そのなかでも、授業の難易度や双方向性については、今後改善の余地があるものと考えられた。また出席確認は紙媒体で行うことを希望する学生が見受けられた。他分野からの受講に関し、内容に興味を持つ学生と難しさを感じる学生が認められた。	授業の難易度や双方向性について、学生の意見を聞きつつ改善していく予定である。	
29	微生物遺伝子資源工学特	18663114	17	6	35%	4.58	回答した学生のうち、「総合的に考えて、現在この授業に満足している」の質問項目に対して83.3%が「5: 強くそう思う」と評価しており、概ね満足度は高いように感じられた。また、学生の学修態度についても「遅刻することなく毎回出席した」者が83.3%、「授業内容についてより深く学びたい」と強く思う者が66.7%、そう思う者が33.3%であり、回答した学生はほとんどが積極的に学修しようとした者であった。	「授業の難易度は適切であったか」の問いに1名の学生が「3: どちらでもない」を選択していたことから、講義内容の難易度を検討すべきと考えた。特に、本講義は実際に遺伝子工学実験を行なっている学生に対し、研究でのトラブルシューティングを目的に講義を行った為、実験上の悩みを抱えている学生にとっては好評であったと思われる(講義後の時間や講義終了後も4~5名の学生の研究相談にのった)。しかし、実際の実験を行ってない学生にとっては、イメージが湧きずらかったと思われ、この点を改善すべきと考えた。 また、「毎回課題があったがその答え合わせを充実させてほしい」という意見があった。これはもっともな要望であったが、各回、受講生に回答を解説させた為、時間を多く取ってしまった、教員からの十分な答え合わせ時間を取れなかった。次回からは、正解例のプリント配布を検討したい。	アンケートに回答した学生数が全体の3分の1程度であり、もう少しアンケートの回答率を上げたい。

平成30年度春学期・大学院授業評価まとめ

整理番号	講義名	講義コード	履修者数	回収数	回収率	平均値	授業評価表の分析	次回講義への対応	その他
30	食品機能学特論	18663301	55	24	44%	4.43	オムニバス形式の授業であり、全体評価は難しいが、学生からの評価スコアはいずれの項目も4以上であり、概ね授業の理解が得られているものとする。	これまでと同様に授業を実施する	特になし。
31	食品品質学特論	18663303	41	21	51%	4.27			
32	機能構造解析学特論	18663306	16	11	69%	4.8	オムニバス形式の授業であり、全体評価は難しいが、学生からの評価スコアはいずれの項目も4.7以上であり、十分に授業の理解が得られているものとする。	これまでと同様に授業を実施する。	特になし。